

社会で活躍できる情報技術者となるために

宮崎 明雄

(九州産業大学・情報科学部長)

九州産業大学情報科学会誌第8巻1号をお届けします。情報科学会誌は情報科学部と情報科学研究科の教育研究や大学内外での様々な活動状況とその成果を紹介する役割をもっています。会誌が2002年度の学部開設以来毎年予定通りに発行されて嬉しく思います。

情報科学部は、2002年度開設以来2学科体制をとってきましたが、現代のIT(情報技術)社会においては、学科にかかわらず情報科学・情報技術の基礎をしっかりと身につけ、社会や人間にとって何が本当に必要な情報なのかを見極め、対処する方法を教育研究する必

要があります。これに対応するため、2009年度に2学科(社会情報システム学科・知能情報学科)・3コース(社会情報システムコース・知能情報コース・情報科学総合コース)から1学科(情報科学科)・2コース(情報技術応用コース・情報科学総合コース)への学科・コース再編を行いました。

再編にあたっては、情報科学総合コースのJABEE(日本技術者教育認定機構)技術者教育プログラム認定は維持しています。また同時に、カリキュラムと職業がイメージできる履修モデルを掲げました。これは、情報システムを作るエンジニア(システム開発、組込みシステム、ネットワークエンジニア)から使うエンジニア(情報システム運用管理、CG・コンテンツ分野)、および中学・高校・大学等の教員や大学・企業等の研究者など職業と専門選択科目を関連付けたもので、現在2学科・3コース制の2~4年次生諸君と1学科・2コース制の1年次諸君の両方に適用できるモデルになっています。

自分になりたいと思う職業を決めている学生諸君は、この履修モデルに沿っ



て専門科目を履修し、必要とされる基礎学力や専門知識を身につけて下さい。まだどの職業か決めかねている学生諸君は、この履修モデルの中から興味のある分野をいくつか選択し、履修モデルの専門科目を通して自分にあった職業を選んで下さい。4年間の大学生活を通して皆さんが情報技術者として巣立っていくことを期待します。

履修モデルについては、学部の紹介パンフレットやホームページ等で公開するとともに、情報科学会誌第7巻1号(2008年10月発行)にも“情報科学部のカリキュラムと履修モデル”と題する記事を掲載していますので、この機会にもう一度読んでもらえると幸いです。

さて話題を変えて、私たちは今パソコンや携帯電話・携帯端末でインターネットを通していくらでも情報や知識が得られる時代に生きています。このように情報の獲得が簡単になればなるほど自分に必要なものを的確に取り出すことのできる力が重要になります。そのような力を養うためにはどうしたら良いでしょう。方法は十人十色で様々でしょうが、私は次のように思います。

一つはその日の出来事を新聞とネットで比較してみる。新聞は見出しの大きさ、紙面に占める位置や分量などで重要な出来事(正確には新聞の編集者が重要と思う出来事)が一目瞭然です。他方、ネットだと通常はカテゴリーごと時間順に出来事が並んでいるだけで、最新の情報は得られますが、その重要性は不明瞭です。新聞にざっと目を通して重要なニュースを見出しだけでも拾っておけば、後はネットでそのニュースを検索し最新の情報を獲得する。このようにして自分に必要な情報を得るトレーニングができるのではないのでしょうか。

もう一つは雑学を含め幅広い読書を通して幅広い教養を身につけ自分なりにいろいろなことを考えてみる。最近、読書をする時間もあまり取れなくなりましたが、休日や出張の移動中など時間があればいろいろな本を読んで思索にふけています。私は司馬遼太郎や松本清張、塩野七生が好きで、いつかは全著作に目を通したいと思っています。

とくに、塩野七生さんの長編小説「ローマ人の物語」と「海の都の物語」は面白いし、ヨーロッパを旅するときの良きガイドブックでもあります。また、現代を生きる私たちのためのヒントもたくさん含まれています。たとえば、「ローマ人の物語」の中で何度となく紹介されるカエサルの次の言葉：

“どんなに悪い事例とされていることでも、それがはじめられたそもそもの動機は、善意によるものであった。”

この言葉一つとってもいろいろな思いがふつふつと湧いてきます。

最近、「大人のための数学①～⑦」（志賀浩二著、紀伊國屋書店）を購入しました。数学は現代社会のあらゆる分野で広く使われていて、今も発展を続けていますが、2000年以上も昔から変わらないところもあります。そののところを改めて学んでみたいと思ったからです。しかし、7冊の本は研究室に山積みになったままでいつか読んでもらうのを待っています。学生の皆さんも社会に出て、学校で習ったに数式や公式に出会い、数学のことを懐かしく思うことがあったら、このような本をぜひ手にとって眺めてみたらいかがでしょう。